

聖書:ホセア書5章1～7節

説教:聞け、耳を傾けよ

はじめに

続けてホセア書を見てまいります。紀元前760年に北イスラエルに住んでいたホセアが預言者として召されたとき、この国は聖書の神を捨ててバアルと呼ばれるほかの神々を拝み、世の中は正義がねじ曲げられ、人の心がますます冷たくなっていくような時代でした。神はホセアを通して、そんな北イスラエルの人々に神に立ち返るようにと語るのですが、人々は頑なな雌牛のようにまったく悔い改めようとしません。これは遠い昔の遠い国のこととは限りません。ホセアを通して語られた神のことばは、今の時代にもそのままあてはまります。

1 聞け

1) だれが聞くのか

町で耳にイヤホンをしたりヘッドホンをして歩いている人を見かけると、以前ならば思わず振り返ったりしたものです。しかし今は普通の光景になり、好きな音楽なのか、ニュースなのか、それとも語学の勉強なのか、とにかく歩いていても電車に乗るときも、みなさん熱心に何かを聞いている。

その聞くということに関して、1節前半にこうあります。「祭司たちよ、これを聞け。イスラエルの家よ、心せよ。王の家よ、耳を傾けよ。あなたがたにさばきが下る。」

このみことばは二つのことを語っている。一つは、だれが聞くべきなのか。それは、「祭司たち」と「王の家」です。今なら「宗教家」であり「政治家」ということで、いずれも人々の上に立って大きな影響力を持つ人たち。ほんとうならば人々の模範とならなければならない人たちです。

2) 何を聞くのか

そして二つ目は、何を聞かなければならないのか。「あなたがたにさばきが下る。」この厳しいメッセージを聞かなければならないのだと言われます。なぜでしょうか。

2 さばきが下る

1) 殺戮を極めた

今日は二つ取り上げます。一つ目は2節です。「曲がった者たちは殺戮を極めた。」だからさばきのことばを聞かなければならない。殺戮と聞くと、多くの人は真っ先にナチスドイツが行ったユダ

ヤ人迫害、ホロコーストを思い浮かべるかもしれませんが。人間はこんなひどいことを平気でしたのだと知って驚く。けれども、ホロコーストは他人事ではない。私たちだってやっている。一つだけ挙げれば、102年前に起きた関東大震災では、在日の朝鮮人が井戸に毒をまいたというデマが流れ、それを鵜呑みにした人々が在日の朝鮮人や中国人を虐殺したという歴史的事実があります。今も、戦争で人が殺されていく、飢饉で人が亡くなっていくというニュースが毎日伝えられています。それを見たり聞いたりすると、なんともやりきれない思いになる。だれがそんなことをしたのでしょうか。聖書には、「曲がった者たち」とある。具体的には、さきほど挙げた宗教家、政治家たち。人々の模範となるべき人たちが、曲がってしまった。その結果、正義も公正も軽んじられていき、殺戮が平気で繰り返されます。だからあなたがたは、神のさばきのことばを聞かなければならないと言われる。これが一つ目。

2) 高慢

次に二つ目の理由として挙げたいのは、5節です。「イスラエルの高慢はその顔に表れている。」あるときこんな公告を見つけました。ビジネスマン対象の講座ということで、どうしたら人とうまく関わりをもつことができ、また上司からも高い評価をもらえるか。そういうトレーニングをしましょうという企画でした。そこには、「謙遜が大切である」と書いてある。それはよいのですが、その次にこう書かれていた。「謙遜のコツを覚えて、ほめられ上手になるにはどうしたらよいか。」私もそんなコツがあるのなら教えて欲しい。謙遜になることがいかに難しいか、みなさんもお存じでしょう。簡単なコツで皆が謙遜になれるなら、世の中はもっとすばらしいものになるでしょう。しかし、聖書にあるとおり謙遜な人は希で、人々は高慢になるばかりです。

3) 主を尋ね求めても

当時の祭司たちはどうだったのか。彼らは、主を尋ね求めることにかけてはプロであるはずですが。6節では、「羊の群れ、牛の群れを連れて」とあります。たくさんのいけにえを献げれば、主は必ず顧みてくださって主を見いだすはずだという祭司たち

の考えを表しています。ところがホセアの時代、祭司たちがこういうことをしても主を見つけることはできないと言われた。なぜなら、彼らの顔に高慢が表れているから。見えるところの形として、神々しい衣装を着て、冠をかぶり、声高らかに「主よ」叫んだとしても、心のうちに高慢があるなら、それは主の目に隠されることはない。必ず見えている。そんな祭司たちには、人一倍の厳しいさばきが下るのだと言われます。

4) 謙遜から遠ざかる世界

牧師である私にとって、これは他人事ではありません。もし牧師が高慢であったなら、その祈りは聞かれないということになる。それで困るのが私だけならよいのですが、そのとぼっちはみなさんにも及んでしまいますから、教会は大変なことになる。

いま私たちは後任の牧師を祈り求めています。これから来られる先生がどんな霊的な資質を持っているか。教会が立つのも倒れるのも、そこにかかっています。来てくれるならだれでもよいとはいかない。霊的な目で慎重に選ぶことになる。とは言っても牧師だって人間です。次の先生にもいろいろな欠けがあるかもしれない。でも何が大切なのです。いろいろな欠けがあったとしても、謙遜さが感じられるなら、私はそういう先生を迎えたいと思います。逆に、私はこれもできますあれもできますというようにたくさんの賜物があつたとしても、高慢さが顔に表れているなら、主が送り出した方ではないと判断すべきでしょう。

どうして、高慢であるのかないのかにこだわるのか。今日のところにあるとおりです。高慢が人を傷つけていくからです。その先に殺戮という悲惨な状態があるからです。そんなところには主はおられません。正義も公正もありません。

この世界のことを見るなら、みなさんも感じておられるとおりに、ますます謙遜さというものから遠ざかっていくようです。自分の正しさを声高に主張し、氣にくわなければ力で相手をねじ伏せる。そんなことを繰り返して高慢になっていくその先によい世界が待っているとは到底思えません。高慢の罪により、人々の愛は失われ、人間の心はますます冷たくなっていきます。その影響は自然環境にも及び、動物たちも苦しんでいます。

3 わたしの顔を慕い求めるまで

1) さばかれる北イスラエル

神は、さばきのことばを聞けと言われます。しかし北イスラエルは聞こうとしませんでした。その結果どうなったか。これは次回取り上げるになりますが、北イスラエルはこの後間もなくアッシリアから政治的な圧力をかけられて右往左往することになります。そのとき、実は自分たちの罪を悔い改めて主に立ち返るせっかくのチャンスだったのに、彼らはそうしなかった。むしろ人間の知恵で危機を乗り越えようとして失敗してしまう。アッシリアが攻めてきて国を失い、捕囚の民となって外国に連れ去られていくという苦しみを味わうことになります。

2) さばきを受けられる神

世の人たちがこの箇所を読んだら、こんなことを言うかもしれません。自分が蒔いた種は自分で刈り取らなければならない。自己責任というのがこの世界のルールです。残念ですが失敗したらあきらめるしかない、と言われておしまいでしょう。

聖書の神もそうなのでしょうか。いいえ、決してそんなことはない。確かに私たちは神に対して罪を犯しました。ですから神のさばきを受けなければならない。罪の影響は様々なところに及び、自然環境さえ破壊してしまい、私たちは苦しんでいます。私たちはいまさばきを受けていると言ってもいい。しかしそこで終わらない。私たちは確かに少しばかり苦しんでいることは事実です。けれども、最大のさばきは免れている、そのことをみなさんは忘れている。最大のさばきとは何か。十字架です。私たちの身代わりとなってイエス・キリストがすでに十字架でさばきを受けられました。それを信じる者は、もはやさばかれることはない。そう言ってくださっている。

3) 神の声に耳を傾ける

私たちはこの時代、何を聞くのでしょうか。耳に心地よいことでしょうか。自分を楽しませてくれることばでしょうか。もちろんそういうこともあつてよい。けれどもまず私たちが真つ先に聞くべきことばがあります。神のさばきと救いのことばです。耳に痛いさばきのことばを、なぜ神は語るのか。私たちが悔い改めて、心から主を慕い求めるのを待っているからです。そうやって私たちを救おうとされている。そのみことばを、神は今も語り続けてくださっている。たちは神の御声に耳を傾け、罪を悔いて主に立ち返りたいと願います。